



かがやき №35

医療法人敬仁会
函館おしま病院・訪問リハビリ
訪問看護ステーションおしま
R7. 2

「自閉症や知的障がいを抱える方への支援」

昨年10月、ホスピス緩和ケ

アに携わる者にとってはとても大切な学びの場である日本死の臨床研究会全国大会が札幌で開催されましたが、私は「知的障がい者のエンド・オブ・ライフを支える」というシンポジウムを企画し、自身もシンポジストとして登壇しました。これまで、このようなテーマが大きな学会や研究会で取り上げられるということはあまり無かったと聞いておりましたので、とても貴重な時間となりました。

今回、このテーマでシンポジウムを企画したきっかけは、今から10年程前に障害者支援施設（社会福祉法人侑愛会）に入居されていた重度知的障がいを伴う自閉症の方2名と関わりを持たせていただいたことでした。当時、私たちは自閉症や知的障がいの特性についてよく理

解しない中で安易に診療を引き受け、日々戸惑いながらケアに当たっていました。まずコミュニケーションの取り方や苦痛の評価に困難さを感じました。点滴や鎮痛薬注射など医療処置については反応を恐れるあまり躊躇し、症状緩和の対応が後手後手に回ってしまいました。また24時間交代で付き添いをして下さっていた施設職員の立ち位置に戸惑い、任せきりになっ

てしまったり、十分に話し合う時間を持っていませんでした。多くの反省を残した中、その後施設からの声かけで一緒に振り返りの時間を持つことが出来ました。施設職員の方も本人の思いに本当に応えられているのか？などの葛藤があったり、私たち医療者とう向き合えば良いのか戸惑っていたというお

話をお聞きました。お互い、同じようなケースを経験したことが無かっただけに、施設側、病院側も手探りの中で対応していたということが分かりました。

自閉症や知的障がいを抱える方においても生命にかかわる病気になったり、高齢化は避けられませんが、人生の最終段階であるエンド・オブ・ライフをどのように支えるのかということと考えるのはとても大切なことだと思います。そのためにはソフト面、ハード面で多くの障壁を乗り越えなければなりません。抱える疾患の重症度が高ければ高いほど、障害者支援施設と医療との密な連携は不可欠です。

残念ながら私たち医療者の中で自閉症や知的障がいの特性を

きちんと理解した上で関わることが出来る人はまだ少なく、そのために必ずしも円滑な連携が成されているとは言えない状況がありますので、もっと踏み込んでこれからもこの問題を考えていきたいと思っています。

関りを持たせていただきました方々からは多くのことを考えるきっかけを与えられました。また通院中や入院中においては、長年家族のように接して来られた施設職員のきめ細やかな支援には頭が下がる思いでした。この場を借りて皆さまに感謝いたします。

名誉院長 福徳雅章

「私がコロナに感染した件」

はじめまして、この度函館おしま病院にお世話になっております武田良一と申します。以前は訪問診療を中心に20年弱仕事をしておりました。ホスピスまた入院治療という経験は初めてなので、福德先生のご指導を頂きながら全力で仕事をしてまいりたいと考えております。

さて表題の件です。2020年11月、時はあたかも「ダイヤモンド プリンセス」の新型コロナウイルス感染症が話題になっていた時です。私も感染致しました。発熱が続くため保健所の指示で市立函館病院へ入院することになり、自分の車を運転し入院の手続きをして入院となりました。

入院翌日の検査で肺炎が悪化しているため、集中治療室へ移ることとなりました。その後、気管切開を受け人工呼

吸器やエクモによる治療のため全身麻酔をしていたため1か月半の間は全く記憶がありません。事情によりエクモ中止しなくてはいけない事態となった時家族には「助からない可能性がある」旨の話があり（感染している為誰も実際に会っていませんが）、家族で相談し了解したそうです。

しばらくは人工呼吸器での治療が継続しましたが幸いにも危機を脱し呼吸器は外すことが出来ました。その段階でも「せん妄状態」が継続し半月程度変な夢の中で暮らしておりました。この時の話だけで三谷幸喜さんの2時間ドラマが出来そうな事が頭の中を駆け巡っておりしました。

意識状態がはっきりし、リハビリにより何とか座ることが出来るようになった段階で本格的なリハビリのため転院いたしました。（まだ鼻腔栄養でした）2か月ほどリハビリを受け何とか自力歩行も可能となり退院し、ぼつぼつ仕事に復帰しました。

これまで大きな病気に罹患することがなく、自分で仕事をしているにも関わらず「万が一」

の対応を考えたことが有りませんでした。治療行為をどうするか、事業をどうするか等家族にとつて判断することが大変困難であったと後日知らされました。（職員はもっとハラハラしていました）

この経験を機に「万が一の時」に関し話し合い、私の希望を書面に残す様にしました。全ての事を想定することは出来ないのですが、やはり皆様にご迷惑をおかけするとは思いますが。

人が死ぬという事はなかなか難しいものだ当事者になり改めて感じた次第です。

この様な経験を大事にしながら今度の診療をしたいと思えます。何卒よろしくお願いいたします。

医師 武田良一



8月 ふれあい看護体験

市立函館高等学校の3年生お二人が看護体験に。将来の夢や希望いっぱいのお二人に患者さん、そしてわたしたちスタッフも癒しを戴きました。お二人の未来が輝きますように



花火大会 ・ 夏祭り 屋上で先生も一緒に花火大会を鑑賞。良き思い出を心に



9月 メンタルヘルスセルフケア研修 ・ 医療安全管理研修

色々違って人間共通点はいっぱい。ちょっとした思いやりが大切。「人は誰でも間違える」けれど「間違えても障害に至らないように考えることが出来る」患者様が安全に過ごして頂けるように



10月 日本死の臨床研究会年次大会(札幌)

伝えたいことが相手にきちんと伝わるように 真剣に心を込めて



10月 Halloween

患者さんも家族もスタッフも皆で仮装してハッピーハロウィン♪



12月 Christmas

クリスマス会はビュッフェ形式で準備。ボランティアさんもお手伝いから演奏までご協力いただきました。遺愛女子中学校・高等学校合唱部の皆様によるクリスマスキャロリング。素敵な歌声を届けてくれました。



皆様のご協力で2024年もたくさんの素敵なイベントを開催出来ました。ご協力いただきありがとうございました。

私はおしま病院に入職してから1年が経過しました。

ホスピス病棟は、最期の時間をその人らしく過ごして頂く場所で、この1年間で患者様・ご家族の方から多くの事を学びました。最期の時を迎えた患者様、ご家族は日々、色々な思いや不安を抱えながら生活しています。そんな中でもちょっとした出来事から、お互いを思いやったり、思い出を残していました。

これからお話するのは、私がここにきて半年間受け持ちをさせて頂いたAさんの忘れられない、エピソードです。

Aさんは男性で奥様が毎日面会にいらしていましたが、あまり会話をしているふうはなく、一緒にテレビを見たり、奥様が患者様の身の回りのことをして帰られるという様子でした。奥様は、「もともと、家にいた時も話たり、一緒に外出することはほとんどなかったんです。」と話しておられ、それでも毎日の面会でお互いを思いやる気持ちは伝わってきました。

「患者様との

関りの中から学んだこと」

当院では、季節ごとにイベントを開催しており、桜の時期だったので、函館公園にお花見に行く企画がある事を伝えました。最初は参加する事に消極的なお二人でしたが、いざお花見に参加してみると、笑顔で桜の花をみながらお二人で過ごされていました。奥様は、「今まで連れ添ってきて、初めて2人で桜を見ました。病気になってから一緒に桜が見れるなんて思っていなかったです。参加してよかったです。」と明るい表情で話され、それを聞いていたAさんも笑顔で何度も頷かれました。この花見から数か月後、Aさん



は妻、姪に見守られ、穏やかな顔で旅立たれました。病室には桜の中で穏やかに笑う2人の写真が飾られており、それを見ながら、奥様より「ここにきて良かった、みんなに良くして頂いたって本人がいつも言っていた。ありがとう。」と涙ながらに話され、私も患者様との関わりを思い出し、一緒に泣いてしまいました。

お別れする事は悲しく辛い事には変わりありません。しかし、思い出は心の中で生き続けると思います。一緒に桜をみた思い出は、奥様の幸せな思い出として心に残ると思います。そして、その思い出のお手伝いをする事が出来き、私は看護師としてのやりがいを感じる事ができました。

ホスピス病棟にきてまだ1年目ですが、これからも患者様やご家族様が少しでも笑顔で過ごせるよう、看護を行ってまいります。

ホスピス病棟看護師 三越未歩

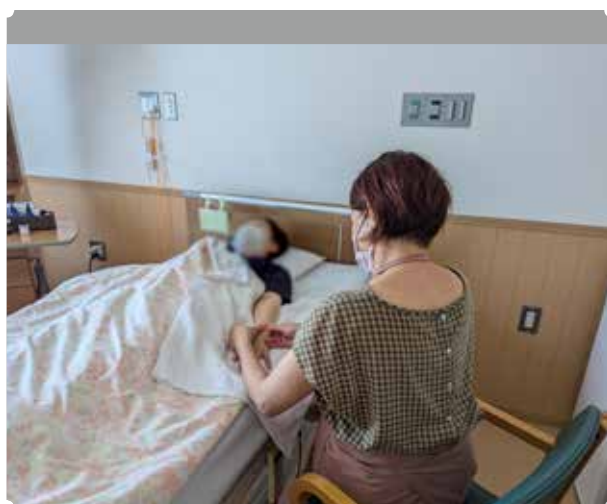
「aromatherapie」



ホスピスの窓から差し込む光が春らしくなってきました。

皆さんは「補完代替療法」という言葉を耳にしたことありますでしょうか？標準的治療を受けながら生活の質を上げる目的で行われる気功・鍼灸・マッサージやアロマテラピーなどがあります。アロマテラピーは女性の患者さん・ご家族・職員からの関心が高いセラピーです。アロマ精油がブレンドされた入浴剤やハンドクリームを使っている方も多いのではないのでしょうか？

昨年5月、ご縁があってイギリスのホスピスでアロマテラピーやレイキの施術をされているウッド恭子さんというアロマセラピストが当院でのアロママッサージボランティアを申し出てくださいました。9月に帰国されるまでの間患者さん、ご家族、職員に施術をしてくださることになりました。施術を受ける方のコンディションに合わせた精油でのマッサージはみんなの心を射止めてしまいました。「恭子さんは次はいつきてくれるの？」恭子さんに逢えることが生きがいと仰っていた患者さんもおら



れました。わたくしたち医療従事者も、イギリスの風を運んでくださる恭子さんと一緒にケアできることで何だか誇らしい気持ちになったものです。

補完代替療法はセラピストの人としての魅力がベースにありました。アロマの芳香が人を癒すのではなく、その人が運んでくれるアロマの芳香だから癒される。それは、看護ケアにも通じます。笑顔、声のトーン、所作、わたくし達も、「あなたにケアをしてもらいたい」と言って頂ける看護実践にむけて2025年も日々精進です。

看護部長 谷口葉子





「癒し癒される心からの医療」

040-0021

北海道函館的場町19番6号

医療法人敬仁会

函館おしま病院・訪問リハビリ

TEL 0138-56-2308

FAX 0138-56-2316

訪問看護ステーションおしま

TEL 0138-30-7287

FAX 0138-56-2317

web <https://www.oshima-hp.or.jp>

Instagram <https://www.instagram.com/oshima.hp/>

